（英語版）
（アラビア語版）

（目次）

見果てぬ平和　―　中東の戦後７５年（百七十六）
第七章　「アラブの春」―はかない夢のひと時（九）
百七十六　短かった春の宴（一―五）

「アラブの春」を欧米先進国（特にメディア、インテリ層）は中東・北アフリカ諸国における独裁者の圧政に対する住民の抵抗運動、政治の民主化運動と定義づけた。「春」という言葉が持つ肯定的で開放的なニュアンスを政治の場面で使ったのは、冷戦下のチェコの民主化運動「プラハの春」が多分初めてであろう。それはソビエト共産主義の圧政に対する抵抗運動を象徴する言葉となり、西欧のメディアはこの言葉に自己陶酔した。１９６８年の「プラハの春」はソ連の介入によりあえなく踏みにじられたが、二十一年後には同じチェコで「ビロード革命」が発生、翌年には東西ドイツ統一が実現して、西欧諸国は自分たちの信奉する民主主義が絶対的に正しい思想（イデオロギー）であり、「プラハの春」はその先駆けであったと確信したのである。

プラハの春のひそみに倣い西欧諸国は「アラブの春」も必ず成功すると信じて疑わなかった。しかし「アラブの春」がそれ以前よりさらに劣悪な混乱と停滞を各国にもたらしたことは否定しようがない。大きな変革の直後には更なる変革を求める勢力と古き良き時代の復活を求める両極端の勢力が激突し、混乱が発生するのは歴史の習いである。チェコの民主化運動が成就するのに二十年以上かかったことを考えれば、「アラブの春」の歴史的評

価を下すのは早すぎるかもしれない。今から二十年後のアラブ諸国はひょっとして西欧型の民主主義国家に変貌しているかもしれない。それはまさに「インシャッラー（神のみぞ知る）」である。

（続く）

荒葉　一也
E-mail: Arehakazuya1@gmail.com